

1945 年 8 月戦災を受けたﾌﾟﾗｯﾄ記念講堂（現 PS 講堂）

ともしび
共生委員会ニュース

2015 年度　5 号

2016 年 2 月 18 日版

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる 2 年生の修学旅行だけでなく、高等部の 3 年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

Why Do You Need So Many Guns?

Andrew Scott Carroll（英語科）

About five years ago, a student asked me if I had a gun. He knew that I am from the United States, and he knew that many Americans own guns. I tried to make a joke, and answered, “With me now? Or at home?” but he didn’t laugh. Students never laugh at my jokes (?), and there is really nothing funny about the statistics on guns in the United States. In the year 2015, there were 353 mass shootings (4 or more people killed at one time), over 12,000 people killed by guns, and 62 shootings at schools.



Many people probably saw, on the news, President Obama’s tears as he talked about gun control and legislation. Some Americans criticized his tears as a sign of weakness. To me, it seems possible that some of these people might own guns, or think that having a gun is a sign of power or strength. Of course, this is not an easy issue, and looking at America’s traditional cowboy culture doesn’t explain it enough. Many Americans believe that it is their fundamental right to protect themselves, and there are 270,000,000 guns in the United States (this number doesn’t include police, soldiers, etc.). When other people have weapons, or when terrorist groups like IS seem to become stronger and stronger all the time, people become frightened.

Useful Vocabulary

Statistics	統計
Mass	多数
Gun control and legislation	銃規制
Criticize	非難する、批判する
Fundamental right	基本的人権
Ownership	所有権
Acknowledge	認める

In university, our coach used to tell us to make sure we went home by midnight. He used to say that nothing good happened after midnight. True or not, he meant that people could put themselves into more dangerous situations later at night, and to me, having more guns creates more dangerous situations. People become angry and use them, they become frightened and use them, and children sometimes use them by mistake.

What does this problem have to do with you? You don’t live in the United States, and gun ownership in Japan is not common. As an American, I have to acknowledge that my country often tries to tell other countries what is right and wrong. A powerful country needs to control itself before it controls others, and if a country thinks having guns is common or acceptable, it thinks guns become an answer or solution. Maybe this is a time when other countries need to ask the USA, “Why do you need so many guns?”

第3回 FOR 会

～大学生と共に被災地支援ボランティアについて考えました～

2015 年 11 月 12 日（木）放課後　15：30～17：00　（中会議室）

FOR（エフ・オー・アール）会は、未来《Future》 のための意見《Opinion》をもう一度考える《Reconsider》会という意味で、被災地岩手県立宮古市でボランティア活動を続ける大学生が企画し、被災地支援やボランティアについて高等部生と一緒に考える機会を作ってくれています。昨年度の 1 月から始まり、今回が 3 回目となりました。



高等部時代に宮古を訪問した卒業生が大学ボランティア団体での活動報告をしました。

まず、夏休み中に高等部宮古訪問プログラムに参加した生徒達、大学生団体「Message for 3.11」、それぞれの活動を報告し合いました。震災から 4 年以上過ぎ、これまでのボランティアとは違った被災地への関わり方を模索していく必要性が感じられます。

その後、「ボランティアについて考えよう　～震災から 4 年の今、わたしたちは・・・～」と題して、大学生が紹介した「Service Learning」についても含め、ディスカッションがなされました。「Service Learning」とは、多くの国で広く行われているコミュニティ・サービス活動を行う社会貢献型の体験学習のことです。単に「してあげる」のではなく、地域社会でできることを考え、実践し、また振り返りを行いながら学びをうるというもので、高等部生の今後の活動を考える視点として重要なものになるかもしれません。



高校生、大学生、それぞれの経験から、意見や感想を述べ合い、刺激を受け合うことができました。

宮古を訪問した生徒ばかりの参加となってしまいましたが、再度、活動を振り返り、また大学生から新たな視点や考え方を知り、互いに今後の活動の意欲となりました。高等部生からは「たいへん有意義なディスカッションができた」、卒業生からは「今年の高等部生はよく考えていてすばらしい」との感想を聞けました。まもなく卒業する 3 年生は、またそれぞれの新たな活動を始め、また今後の後輩へも何かを伝えに来てもらえればと期待しています。



大学生からは「サービスラーニング」が紹介されました。

表参道　今・昔

田中昭雄先生（1955 年～1991 年　高等部在任：国語科）

2015 年 7 月 3 日 NHK テレビで女子アナウンサーと女優さんが二人で、「表参道女旅」として今賑やかな表参道（青山通りから神宮橋（原宿駅）までの約 1km の間）の裏表を取材していました。まことに賑やかにモダンな街並みに変わってしまいましたね。



私は昭和 12 年から平成 2 年まで近くに住んでいたのですが、その変わりように目をパチクリ。街並みの変わりように目を奪われているときに、思い起こしたのは 1945 年（昭和 20 年）5 月 25 日夜の東京山の手の大空襲です。（当時を思い起こすたびに本当に胸が裂ける気持ちになります。）

B29 爆撃機約 500 機が約 3,300 トンもの焼夷弾攻撃をして、人家・人を焼き尽くす作戦が展開されました。青山学院も私の家も、一夜にして皆焼け野原になってしまいました。（何もかも焼け落ちてしまい、渋谷、更には富士山まで！よく見えました）

現在、表参道と青山通りの交わる所にみずほ銀行がありますが（昔は安田銀行といいました)、そこには逃げ場を失った多くの人々が壁にもたれるようにして亡くなっていました。地獄そのものの様子でした。

毎年「表参道」近くの「善光寺」で青山地区の戦火に斃(たお)れた人を偲んで追悼の法要が営まれています。今年は戦後 70 年という節目の年を覚え私も参列してきました。

あの時、1 メートル違えば私も焼夷弾の直撃を受けていたかもしれないと思うと、生き残った事を感謝し、更に平和な日本を、（精神的に）強い日本を作っていかなければと思っています。

青山学院に学ばれた皆さんは、在学中に一度は表参道を通った事があると思います。今は楽しくおしゃべりをしてあちこちの店を見ながら散策をすることもあろうかと思いますが、どうぞ昔の方々の悲惨な最期に思いをいたしていただきたいと思います。そして平和な日本、明るい日本を目指して少しでもお役に立てることがあれば力を尽くそうではありませんか。



初等学校(現初等部校舎・礼拝堂)焼け跡
1945 年 8 月

（写真**上**：2010 年 7 月 4 日高校野球都予選の際のもの。高等部 12 期 HR31 K. K. 君撮影。写真**左**：青山学院資料センターより提供。本文：青山学院高等部同窓会報 VOL.70 より転載。）

「夏のアトリエ」

企画運営：やまん B・art、NPO 法人 ACC・希望

奥野美果（芸術科非常勤講師）

A：「B くんの学校は福島産の牛乳飲まないの？」

B：「おまえオカシイよ、汚染されているかもしれない牛乳を、なんでわざわざ飲むんだよ！？」

A：「だって、近くの牛乳生産している人たちが可哀想じゃない？！　私達が飲まなかったら、その人たちのお仕事はどうなるの？　私は飲むよ！」

C：「、、、ねえ、知ってる？ 僕たちの子供って、奇形児が生まれるかもしれないんだって。」



2011 年 7 月、福島県内から招待した８人の小学生たちと、長野県原村の山小屋で朝ご飯の食卓を囲んでいる時の会話である。その場にいた私は、子供達の中で起こった その言い合いに口を挟むこともできず 胸が締め付けられる思いで、不安を抱える彼らの側にただいることが精一杯だった。

東日本大震災から５年が経とうとしている。この間、何が変わり、何が元に戻ったのか？ 10 歳前後の子供に、あんな言い合いをさせてしまった、その状況は何か改善されたのであろうか？ その中で、仲間たちと「夏のアトリエ」を隔年で開催して福島県界隈の子供たちと過ごす数日間は、私の中でこの現実を風化させないためにも、必要なものとなっている。震災後、自分たちに出来る事をと考えて、アート活動を中心に子供達と過ごす「夏のアトリエ」を企画した。中心メンバーは、女性美術家のグループと資金集めも担当するＮＰＯ法人のスタッフである。

2011 年のアトリエは、福島在住の小学生８名が参加してくれた。５日間、企画盛りだくさんのスケジュールの中で子供たちは全身を使って絵を描き、ものを作り、思いっきり走りまわっていた。ひとつ屋根の下に寝起きし食事を共にして、企画側も子供たちも充実した時間を持つ事が出来たと思う。この時共同制作した作品のひとつ巨大絵は、半年後に美術家メンバーが東京で開催したグループ展内で、天井から吊るして展示をした。それを、わざわざ福島から子供たちが家族で見に来てくれたのは嬉しい出来事だった。

2013 年には宿泊所を移動して同じ長野の原村太陽館で、2015 年には参加者の移動の事も考慮し福島県の西会津国際芸術村でアトリエを開催した。西会津町は福島県とはいえ、震災後の放射線量は東京よりも低いほどの土地である。芸術村は元中学校にあり、広い校庭を前にした２階建ての木造校舎は気持ちのよい環境で、町の方との交流もふくめ、自由にのびのびとした数日間をみんなで過ごす事が出来た。

隔年で開催してきた 5 年の間に、最初に参加してくれた小学生たちは皆中学生高校生になり、皆勤賞リーダー格で参加してくれる子もいる。子供達の成長を目の前に、進展があまりない現状とはどう向き合っていくのか。夏のアトリエは、ボランティアの参加や寄付の提供など様々な方々を数えれば 100 人近くの協力の元で可能となり開催される。その中で、特に大学生参加者の存在は圧倒的に大きく、子供たちとの交流の中で様々な印象的シーンを生んでくれる。

ほんの数人の子供たちと多くのスタッフが共に過ごすわずかな時間、何を求め、何が出来るのか？ 色々な課題を持ちながら、これからもアトリエを続けていきたいと思う。

（＊現在 2017 年夏開催に向けて準備中。

みなさんのボランティア参加も大歓迎です！）



